

辺野古・新基地建設反対運動参加者 女性のライフヒストリー

服部 あさこ*

目 次

1. 本論文の目的
2. 研究方法
3. Yさんのライフヒストリー
 - 3.1 少女期：「女のたしなみを身につける」ことを望む両親
 - 3.2 会社員時代：社会運動は「特別な人がやる」もの
 - 3.3 男性に“翻弄される”20代の日々
 - 3.4 女性による反基地運動との出会い
 - 3.5 「断食座り込み」で意思を表明
4. 小括：「私の問題」として認識するためのフレーミング

1. 本論文の目的

沖縄県の普天間基地の移設先とされる名護市辺野古では、基地受け入れを拒む辺野古の住民によって基地建設反対運動（以下「辺野古の運動」と略記）が始められた。長期化する中で、外部から多くの人々が参加し、辺野古のある名護市や沖縄県内だけでなく、東京、大阪、名古屋などヤマト¹⁾の大都市でも定期的な街頭アピールが行われるなど、規模も広がり、日本

* 専修大学文学部兼任講師

における代表的な反戦・平和運動の容貌をもつようになった。

外部からの参加者には、労働運動、平和運動、自然保護活動などに関わってきた運動家も多いが、半生を社会運動と無縁に生活をしてきて、辺野古で初めて社会運動に携わった人もいる。

本報告では、辺野古の運動の参加者である Y さんのライフヒストリーから、壮年期までを社会運動と無縁に過ごした彼女が、辺野古の運動に長期的に参加し、単独での断食行動など主体的な運動を起こすまでに至った動機と過程を描き出す。

平和を祈念する思いをもつ人は多いが、具体的な社会運動への参加は、誰もがすることではない。さらに、自ら何らかの行動を企画して実行する、いわば運動主体になる人は多くはない。Y さんのライフヒストリーからは、社会運動に無縁だった人が、主体的に運動に関わるようになった要因を見いだすことができるだろう。

2. 研究方法

筆者は、2004年から専修大学教授の鐘ヶ江晴彦が行ってきた、辺野古の運動に関する研究に協力するかたちで、2006年以降、主として辺野古の運動に参加する女性を対象に、ライフヒストリー・インタビューを行ってきた。これまでにインタビューに答えてくれた女性のインフォーマントは10名、それぞれ3～6時間程度のインタビューを実施した。

本報告では、Y さんのライフヒストリーをとりあげる²⁾。Y さんは2004年から辺野古の運動に関わり始めた。同年には那覇防衛施設局前で単独での断食座り込み行動を行い、防衛施設局の移転以後も定期的に辺野古のテント村に通っている。

Y さんを取り上げるのは、彼女の壮年期までの生活が社会運動とも基地

とも疎遠であるためである。彼女は学生運動の経験をもたず、労働組合に入ったこともない。ごく短期間をのぞいて独身で、小規模な印刷会社を経営して多忙であったこともあり、消費者運動などに携わる機会もなかった。また、戦争の記憶も乏しく、沖縄出身でもない。すなわち、反戦・平和運動に向かいような見えやすい動機もない。筆者がインタビューした人の中には、辺野古の運動で初めて社会運動を体験した人が他にもいるが、Yさんの経験には、そのような人々から語られる象徴的なエピソードが多く含まれる。

Yさんの、辺野古の運動への参加の経緯をみることで、社会運動と無縁の人を運動へ向かわせる要因の一部を知ることができるだろう。

3. Yさんのライフヒストリー³⁾

3.1 少女期：「女のたしなみを身につける」ことを望む両親

Yさんは1940年、東京都北区で生まれた。父親は建設会社に勤務する一級建築士、母親は専業主婦である。両親と兄3人、弟妹が1人ずつの8人で暮らしていた。

Yさんの娘時代はいわゆる「お嫁さんコース」を進んでいたといえる。公立小学校を卒業後、両親の意思により、私立の中高一貫の女子校へ進学。同校は普通科・商業科・家庭科に分かれていて、その家庭科へ入れられた。Yさん自身がとくに家政に関心があったわけではなく、父親が、女の子には学問よりも「女のたしなみ」を身につけさせるべきだと考えたためであるという。

Y：親が決めたことにはもう、何しろあたしは、従順で、もう、そこに行きなさいって言われて、その試験受かって、行ったんだけどさ。そ

こは、いわゆる中小企業やお店の子女のための（学校）だから、簿記を教える商業科と、家庭科と、普通科かな、ある学校。で、うちの父は、古い人だから、「女は学問はいらない」、それよりも、家庭の、料理だとか、花活けるとか、お茶あれすとか、「女のたしなみを身につけるのがいい」って思っている人だったのね。だから、アハハ、その、家庭科っていうのに行かされた。アッハハハハハ。でも私、洋裁もそんなに好きじゃないし、フフフフ、だから、自分の意志ではないね。

学校での成績は優秀で、高卒後の進路について、学校からは大学進学を意思を問われた。しかし両親は、女の子に大学進学は必要ないと考えており、Yさん自身も進学を希望していなかった。そのため、高校卒業後は、学校の推薦で大手都市銀行に就職した。

その頃までのYさんは、親の言うことに従順で、高校卒業後の進路についても、自分で決めるような意識はなかったという。「女のたしなみ」を身につけ、婚家に歓迎される「お嫁さん」となることを期待される家庭で、主体性を剥奪された状態で成長したといえるだろう。

Y：高校卒業する時に、先生に、「どこの大学受けますか」とか言われたんだけど、うちの親は、「大学なんか必要ない」（という考えをもっていた）。だから、推薦で、銀行に就職したの。中、高、もうちょっと違う学校に行ってたら、奨学金貰って（大学へ）行こうとかっていう知恵がわいたかもしれないけど、もう、本当にその頃は、何にも、自分でどうこう（将来を決めようという状態）じゃなかったね。だから、私の学歴は高卒です。

3.2 会社員時代：社会運動は「特別な人がやる」もの

Yさんが銀行員として働き始めた時期は、60年安保闘争の時期であり、運動を耳目にすることもあった。しかし、大学生でないYさんにとって、社会運動は「特別な人がやる」ものという認識であったという。

とはいえ、日本の国防や日米関係に全く無関心であったわけではない。自衛隊の結成に際して違和感を抱くなど、日本の軍事化を意識することがたびたびあった。

Y：戦後ずっと、日本の成長期を見てきたけど、自衛隊ができた時に、「軍隊なんか持たないはずだったのに」とかさ、そのつどいろいろ、「うん?」「うん?」と思うようなことがいっぱいあったけど、仕事に専念っていうか、日常生活に（忙しく）、あの一.....そういうのは特別な人がやるとか、自分じゃないだろうとか、思っていたわけ。「ガンバロー」なんていうのは嫌だなと思っていたから、アッハハハ。だから関わりませんでした。

K：60年安保の時は、銀行員だね、

Y：そうよ、だから、あたしはそういうことに関してはほんとに、あの、銀行の人からさ、「今、大変なんだよね」みたいなことを言ってるのだけ記憶にあるぐらい。

3.3 男性に“翻弄される”20代の日々

就職して3年の間に、Yさんは、社会派の雑誌に関わる仕事をしたいと考えるようになっていた。しかし、高卒の学歴では出版社の求人はない。Yさんは大卒の学歴を手に入れたと考え、銀行を退職し、都内の大学の二部に通うようになった。

結果的に、この選択によって、「お嫁さんコース」から大きくはずれることになった。Yさんはこの選択を「波乱の始まり」と形容している。

大学に通い初めて一年に満たない頃、Yさんは大学で会った男性から熱心に言い寄られる用になった。それまで交際経験などはないのでどう対処してよいかわからず、押し切られるように交際が始まった。

Y：本にかかわる仕事をしたいと思ったもんだから、でも、大学出てないと、募集もないんですよ。そいでね、大学の、夜学でも何でも入るかな、と思って。で、それからが波乱の始まりなんだよね。そこ（銀行）におとなしくいてさ、銀行員と結婚でもすりゃあさ、ねえ？　ごく普通の暮らしがあったはずなのにさ。飛び出したもんだからね。・ ・ ・（中略）・ ・ ・（通っている大学で）まとわりつく男が出てきてさ。なにしろ、人が帰ってくると、外へ待ってたわけよ。だから、ストーカーみたいなものよね、今の時代だったらね。だけど、その、なあに、男性経験もないから、それに翻弄されて。

やがてYさんは妊娠し、すでに就職していた相手の男性と結婚して、学業を断念せざるを得なくなった。

ところが、子どもが生まれて間もなく、結婚生活は夫の浮気によって破綻する。Yさんは、「子どもは両親一緒にのところで育つべき」という考えを強くもっており、子どものためを思って、手放す決断をした。25歳の時だった。

この当時のYさんの記憶はかなり曖昧で、途切れ途切れになっている。夫が引き起こした問題や、子どもとの別離のショックが大きく、「精神的にもちょっと、おかしくなって」いたのだろうと語っている。

Y：こっちは、子どもができて大変な思いをしているときに、夫が、他の人ができたわけ。ね？　ほんで、どうするか、こうするかって、大もめにもめたんだけど、あの.....あの、あたしは、子どもは両親一緒

のところで育つべきだみたいなことを、固く思ってた人だったもんだから、一人で育てるのは、子どもにかわいそうだったのね。そういうことを話し合った結果、向こうが引き取って、向こうで結婚しますということになって、私は一人に戻ったわけ。・・・(中略)・・・(その後しばらくのことは)もう、全然記憶にない。そんなこともあったなあ、というぐらいのことしか、もう思い出さないねえ。その.....子どものことやなんかもあって、精神的にもちょっと、おかしくなっていたんだと思うよ。だから、記憶が、途切れてしまってる。

その後勤め始めた印刷会社で、Yさんは同じ会社の既婚男性からアプローチを受ける。Yさんはこの当時を振り返って、「悲惨な状況」と形容する。離別のショックが癒えないところへ、新たに恋愛問題に悩まされ、周囲から「幽霊みたいに歩いていた」と評されるほど憔悴していた。

Y: あらためて、一人で暮らして、何をしようかって思った時に、じゃあ、“自分は、こういうことやりたかったんだから”と思って、何とかいう会社に行ったわけ。出版物をやるって書いてあったから。そこでまたさ、とんでもない、ハハハハハ。男の人がさ、私にまた付きまとしてさ、ハハハハハ、ね? もう一、私はもう.....なんかあの時ほんと、悲惨な状況だったよね。(相手の男性は)結婚している人だったのね。それなのに(言い寄ってきた)。あたしは、子どものことで.....なんか、後で聞くと、「幽霊みたいに歩いていた」っていうぐらい(精神的に打ちのめされていた)。

離別した夫と、上述の既婚男性とについて語る際、Yさんは何度か“翻弄される”という表現を用いた。言い寄られてもはっきりと断ることもできず、夢を叶えるために始めたはずの学業を断念し、相手の関心がよそに

移ったことで家族を失った。一人になって歩み始めた職場でも、既婚の男性から関心を寄せられた。「お嫁さん」になることを当然の将来として、女性としてジェンダー化されて育ち、結果的に主体性を剥奪されてきたYさんは、性的対象として“翻弄される”しかない状況に置かれていたといえるだろう。

この頃から、Yさんは“翻弄される”状況を打開しようと考えようになった。そのためには「自分でなんかしなきゃだめだ」と、写植の技術を生につけ、小さな事務所を借りて独立した。

経営を軌道に乗せるため、写植作業の一方で営業にも回り、人を雇うほどに会社を成長させた。自分の力で生活を切り開き、それがやっと安定してきたことで、「男の問題、子どもの問題、クリアできたような」心境になることができたという。男性に頼ったり、私的なことで関わったりせざるを得ない生活でなくなったことで、女性としての不利益を過去のものとすることができたといえるだろう。

Y：そんでねえ、これはもう、自分でなんかしなきゃだめだ、男に翻弄されているのではどうしようもないなと思って。たまたま、写植、（これから需要が増えるから）いいよっていう話を聞いてさ。写真植字研究所というのが、大塚にあったわけよ。そこに、習いに行ったわけ。小さな安い機械を買って、やっていけばいいかなと思ったわけよ。で、〇〇町に、もうそれこそ3畳くらいのちっちゃな事務所借りて、商売を始めたのが、30ぐらいの時だったと思うよ。

K：最盛期にはどのくらいの人を雇っていました？

Y：7，8人。ちっちゃな会社ですよ。・・・(中略)・・・月に一千万ぐらいの売り上げ、あったことはあったよね。だから.....そうね、写植やって10年ぐらい経って、やっとなんか、経済的にも安定して、.....やっとなんで、なんか、男の問題、子どもの問題、クリアできたよう

な気がするよ、ウッフッフッフ。

3.4 女性による反基地運動との出会い

Yさんが、平和運動に関わるきっかけとなったのは、市民運動家の庄幸司郎氏との出会いである。「第9条の会 USA」の設立者であるチャールズ・オーバービー氏の講演が東京で行われることを知り、参加したところ、庄氏の立ち上げた「9条を世界に広げる会」の事務局を手伝うことになったという。1993年、Yさんが53歳の時のことである。

洋子さんは庄氏に出会い、「こういうことをやっている人もいるんだ」と思ったという。

漠然と日本の平和について関心をもっているものの、なにをすればよいのかわからないというもどかしさを抱えていたYさんにとって、自身と同じように学歴がなく、事業を経営している庄氏に、共通性を感じたものと思われる。そして、社会運動の情報を発信するミニコミ誌の発行や、社会問題を扱う映像製作会社への投資を通して社会運動に携わる庄氏の姿に、社会運動への関わり方のヒントを見いだしたのだろう。

Y：初めてあたしがそういう、その、社会的なことにかかわろうと思ったのはさ、庄幸司郎さんって知ってる？ その人がさ、オーバービーさんと呼んで、「9条を世界に広げよう」という運動を始めるって、新聞かなんかで読んでさ。そこに参加して、事務局、手伝うようになったのが、こういう世界に入る、初めての（きっかけだった）。ハハハハハハ。・・・(中略)・・・彼は、お父さんが宮大工だったのね。だから、満州の各地に造る、その、神社の鳥居とか作る、そういう仕事をやってた人なんでしょう。うん。で、敗戦と同時に引き揚げてきて、すごく苦勞して、あの、大工さんとして（働いて、後に）、庄建設を立ち上げたわけよね。で、その利益を、彼は、独特の哲学でさ、

「税金で払うのはばかばかしい」ってということで、その『告知板』（庄氏が出版していたミニコミ誌）とかそういうのに（使っていた）。そういうことで初めて、「ああ、こういうことをやってる人もいるんだ」と思って。

Yさんが沖縄の基地問題に出合ったのは1997年のことである。この年、Yさんは会社を共同経営者に譲って、沖縄に旅行に出た。庄氏との交流を通じて社会運動の情報を得るなかで、自身が、日本の国防やそれに関する日米関係に疑問を抱きながら、沖縄の抱える問題をよく知らないことに気づかされたからだ。

旅行先の沖縄で、Yさんは女性史研究家のもろさわようこ氏を訪ね、もろさわ氏から、那覇で行われるある集会を訪ねることを勧められた。「心に届け女たちの声ネットワーク」による、東京での「道ジュネー⁴⁾」準備集会であった。

普天間基地返還要求から辺野古新基地建設反対へと続く反基地運動は、1995年に発生した少女暴行事件への抗議集会である「米軍人による少女暴行事件を糾弾し日米地位協定の見直しを要求する沖縄県民総決起大会」がその出発点となった。この抗議集会は、日本の基地問題にジェンダーの視点を取り込んだ最初の運動だといわれている（勝方＝稲福、2006：71）。

抗議集会のスローガンに少女暴行への抗議を掲げるにあたり、大きく影響を与えたのは、北京女性会議から帰国したばかりの女性メンバーによる、「戦争基地と強姦がいかに密接に結びついているか」という視点だったという（勝方＝稲福、2006：73）。そのメンバーの一人であり、また、少女暴行事件を受けて1995年11月に発足した「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」代表でもある高里は、「紛争下、戦時下にすべての人に向けられる攻撃の不安、恐怖に加え、女性はその性の故に別の暴力」があり、

それが従来は「軍隊の侵略行為に付随するもの、あるいは先勝国として当然と思われてきた」ことを指摘する。高里らの訴えは、基地問題を場所の問題ではなく、軍隊の存在の問題ととらえる視点を提供した(高里, 1996: 22-23)。すなわち、基地があるということは、そこに軍隊がいることであり、戦時下と同様に人々は暴力の恐怖にさらされる。とりわけ、男性性を称揚し反作用的に女性性を貶下する軍隊の圧力ゆえに、基地周辺に暮らす女性は常に性暴力の危険にさらされているといえる。

勝方=稲福によれば、抗議集会において上のスローガンが掲げられるにあたり、「基地問題を女性問題に矮小化するな」という批判があったという。この意味するところは、「“基地をなくする”という大儀のためには“些末”なことに拘泥せず、一致団結して反対闘争を展開すべきである」という論理の存在である(勝方=稲福, 2006: 73)。逆に言えば、それまでの反基地運動においては、基地の存在によって、地域の女性が軍人による性暴力の被害にさらされてきたことは、「些末」なこととして片づけられてきた。女性が女性である故に抱き続けざるを得ない恐怖は、反基地運動の主要なテーマとなり得てこなかったといえる。

1996年12月、普天間飛行場の代替施設を辺野古に建設することを含んだSACO 合意が発表された。辺野古のある名護市では、受け入れの是非を問う市民投票を求める運動が起き、市民投票の実施が決定されると、反対派、賛成派それぞれが投票を求めて運動を展開した。この時期、沖縄では各地に基地反対を訴える市民団体が結成された。そこには、それまでに社会運動の経験をまったくもたない女性たちも多くいた。

少女暴行事件に対する抗議を集会のスローガンに掲げることの是非が争われたように、反戦・平和運動は政治色が濃く、その中で女性が日常的に抱く性暴力への恐怖は個人的なこととして閑却されてきた。しかし、基地問題が女性の人権問題としてフレーミングされるなかで、女性たちが自分たちの生活の問題として基地問題を認識する状況が調ったといえるだろう。

それゆえに、社会運動に関わることのなかった女性たちによる反基地運動が沖縄の各地で生まれたものと思われる。

各団体の連帯もみられた。「心に届け女たちの声ネットワーク」も、女性による市民団体の連帯の一つである。要求状を入れた盥を頭に乘せた女性を先頭に、「基地のたらい回しはやめて」というメッセージを訴える「道ジュネー」により知名度を獲得した。基地問題が女性の人権の問題、生活の安全の問題としてフレーミングされるなかで、自分たちの生活の危機というせっぱ詰まった要求⁵⁾から意思表示を始めた彼女たちの行動は、ユニークな魅力をもっていた⁶⁾。

Yさんが「心に届け女たちの声ネットワーク」の集会を訪ねた1997年末は、市民投票が移設反対多数の結果でありながら、市長が基地受け入れを表明し、直後に辞任するという出来事があった後である。この集会で女性たちは、「道ジュネー」を東京で行い、基地問題を県外に訴えようと準備していたのである。

Yさんは、東京に帰ってから、「心に届け女たちの声ネットワーク」の受け入れ事務局にアクセスし、その事務の手伝いをした。そこを通じ、東京で社会運動を続けてきた人々と、また新たに出会った。人との出会いから運動の一端につながっていったこの経験の一連の語りの後に、Yさんは、「何の運動もやったことがない人がよ？」と付け加えた。社会運動を、自身の関わるものと考えたことがなかったYさんが、沖縄への素朴な関心から、多くの運動家に出会うことになったことに、自分のことながら驚きがあったものと思われる。

Y：もろさわさんから、「今、沖縄の女性たちが、本土の方へ、『たらいまわしはやめて』っていう運動をしようと、那覇で集会をしているはずだから、そこへ行ってごらんなさい」って言われて、そこへ、迷子になりながら行ったのが、その、沖縄の女性たちと初めて会ったわけ

ね。その時に、この基地問題（に初めて出合った）ですよ。97年。「たらいまわしはやめて」ってことでさ、手紙を盥に入れて、銀座を練り歩くっていう、その話し合いを、何十人かの女性たちが集まってやってたわけ。そいであたしは、「へえー、すごいな」と思って、じゃあ、東京で、来る人のお手伝いをしようということで、受け入れのお手伝いをした。そしたら今度はまた、東京で、運動を長くやっている人たちとも知り合ったわけね。何の運動もやったことがない人がよ？

上述したように、Yさんは、「ガンバロー」と拳を突き上げたり、政治的要求を掲げて行われるデモのようなものを自分と縁遠いと考えていた。「道ジュネー」との出合いは、女性としての日常の安全を、自分たちの言葉、自分たちの仕草で求めるやり方があることをYさんに知らせたといえる。

性暴力を含む暴力に、自分や家族がさらされるという危惧に脅かされることなく日常を送りたいという、女性としてのあたりまえの思いは、「お嫁さん」コースに乗せられて、女性らしい女性としてジェンダー化されて育ってきたYさんにとって、十分になじみ深いものであろう。性的な収奪の危惧もまた、Yさん自身の“翻弄されて”きた経験と共通するものである。「道ジュネー」との出合いは、Yさん自身の日常の経験が、平和運動の動機と合致することを感得させるものであったと考えられる。

3.5 「断食座り込み」で意思を表明

1999年に、Yさんは沖縄に移り住んだ。東京で暮らしては、沖縄の抱える問題を十分に理解することができないと考えたからだ。Yさんが辺野古に定期的に足を運ぶようになったのがいつであるか、記憶は定かではないが、海底ボーリング調査のための準備作業が開始された2004年4月19日には「命を守る会⁷⁾」メンバーとともに抗議行動を行っており、その後

はほぼ毎日座り込みに来ていた。9月に防衛施設局による会場作業が開始されてからは、カヌーによる阻止行動にも参加した。

なかでも特筆すべきは、那覇防衛施設局（以下「那覇防」と略記）前での断食行動、及び、それに続く座り込み行動である。辺野古海上の阻止行動のなかで、泳ぐことができないYさんは、自分が辺野古の浜にいても「足手まといになる」から、何かほかのことをしようと考えた。そこで考えたのが断食座り込み行動である。

そのアイディアについて、Yさんは、前年に浦添市のアメリカ総領事館前で断食行動を行なったTさんに相談している。Tさんからは肯定的な反応があり、それに勇気を得て、断食行動を決行することにした。

Y：毎日海（辺野古の浜辺）に行っていましたよ。2004年よねえ？ まだテントが仮設のテントでさ、真っ赤に日焼けしたの覚えてるよ。

K：カヌー隊には、カヌーは乗ったよね。どのくらいの期間乗ったかね。

Y：いやあー、そんなに長く乗りませんよ。“あたし泳げないんだよな、これ、みんなの足手まといになるよな”って思ったわけ。だから、“これ、なんか、他を考えなきゃいけないな”と思ってさ。ギリギリの戦いするときの、足手まといになって、みんなに迷惑がかかっちゃうってことで。で、Tさんに相談したのよ。「あたし、とても海は無理だから。防衛局相手に（断食行動を）やったらどうかと思うけど、どうだろう、やっていいとおもう？ 悪いと思う？」って言ったら、「やってくれたらうれしい」って言われたから。今考えるとそりゃ無謀なことですけど、ハッハッハッハッハ。あの頃はなんかねえ、

K：うん。みんなそれぞれ、いろんな人がいろんな所でいろんなことやってたからね。

断食行動は20日間続いた。20日間でやめたのは、Yさんが行動に際し予

想していなかったこととして、女性たちからの支援があったためだった。年末という時節柄、彼女たちは大掃除や正月の準備などもしなければならず、長く続ければ迷惑になると考え、終了を決めた。

1日の入院の後、今度は9時から17時までの座り込みに移行する。これは、那覇防が移転した2008年3月まで続いた。

断食行動をしている間に、どんなことを考えていたのかという問いに対して、Yさんは「考えてなかった」と笑う。そして、「こんなことやって何の意味があるかなあと思ったけど」と付け加えた。

K：断食に関しては、日数の一定のめどみたいなもの、自分でどっかの段階でもうけた？

Y：日数は全然考えてなかったんです、うん。やれるところまでやるはずだったんだけど、ちょうど12月の20日過ぎでしょう？ 女の人たちは、お正月の準備と、暮れのお掃除とか色々あって、迷惑かけてるっていうのが分かったの。“あ、これは長くやっちゃまずいな。じゃあ、キリが良い20日で、終わろうかな”と。病院にも、ちゃんと誰かが連れて行ってくれて。もう皆さんのそういうサポートがすごくて、びっくりして。・・・(中略)・・・一日入院しただけで、そのあとまた、今度は断食じゃないあれで(座り込み)やりましたよ。

K：断食してる頃は、どんなことを感じて、考えたり感じたりしてた？

Y：それがねえ、考えてなかった、アッハッハッハッハッハ。.....“こんなことやって何の意味があるかなあ”と思ったけど、

「何の意味があるのか」という迷いは、その後の座り込みの中でも時々感じていたことである。この時期のことを思い返ししながらYさんは、「意思表示する」ことが大切なだと語っている。断食も座り込みも、Yさん自身ができる「意思表示」であったといえるだろう。

Yさんは、平和運動にかかわり続けた理由のひとつに、別れた子どもへの思いを口にした。子どもと一緒に暮らして育てることができなかった分を、「若い人とかにプラスになるようなことをして」いきたいのだという。

Y: “これ（座り込み）やって、何の意味があるかな” っていうのは、時々考えたけどね。・・・（中略）・・・（防衛施設局）局長はとうとう最後まで、面会も拒否されたし。だから、単に座り込んで、抗議の意思表示をしたというだけで終わってしまったけど、写真をいっぱい、飾ったのね。だから道行く人は、結構見てったの。そういうふうな意味では、辺野古を伝えることができたかな、と思いますね。.....結局、民意っていうものを意思表示するっていうことが、やっぱり大事なんじゃないかなと思うのね。そのことを、やっぱり、若い人にも伝えて.....だって社会をよくするのも悪くするのもさ、今の時代を、同時代を、生きている人たちの責任な訳だから、うん。・・・（中略）・・・：とくに、ねえ。子どもについての、あれ（思い）があるから、（Yさん自身は今後）若い人とかにプラスになるようなことをして、死んだらいいんじゃないかな、っていう、のが、フフッ、今の、思いですね、はい。

4. 小括：「私の問題」として認識するためのフレーミング

Yさんのライフヒストリーから、彼女が辺野古の運動に参加する要因として以下のことがいえるだろう。

1) 平和に対する漠然とした祈念をもっていたこと

Yさんは、自衛隊の編成や日米安保などの情報から、日本の際軍備傾向に漠然とした不安を抱いていた。しかし、それを具体的にどのような行動

に移してよいかわからなかった。

2) 女性としてのジェンダー的な困難の経験があること

Yさんが平和運動を疎遠に感じていたのは、大学に行っていないためである。それは、女の子には学問は不要であるという伝統的なジェンダー観のもとで育てられたためである。

主体性を剥奪されて成長したことで、男性の求愛に抵抗できず、「翻弄」されて、希望を断念し、安定した生活を失うことになってしまった。性的対象としてまなざされることにどう抵抗してよいかわからない状態におかれていた。

3) 日常の経験と平和運動との合致

1995年以降、基地問題は女性の人権問題としてのフレーミングがなされるようになり、女性として日常の安全を求めることが平和運動の主題の一つとなった。

Yさんはちょうどその時期に、沖縄で女性たちが行っているユニークな反基地運動と出会い、自身も反基地運動に関わるようになった。その出会いによって、女性としての人生上の困難の経験が、平和運動の動機と合致することを認識したといえるだろう。

熊本博之は、辺野古の運動にさまざまな属性を持つ人が参加する理由を、フレーミングの効力として分析している。すなわち、基地移設反対運動の理由に「反戦・平和」のみでなく、希少な珊瑚礁とジュゴンの住む海を守るという「自然保護運動」としてのフレームを提示し、それが、従来の反戦平和運動につきものだったイデオロギー色をやわらげ、社会運動に関わる機会の少ない女性や子どもにかかわりの契機を提供したという（熊本，2004：133-134）。同様に、基地問題を女性の人権問題とするフレーミングは、日々基地と接して生活しながら、反基地運動に縁遠かった沖縄在住女性たちを運動に巻き込むことに成功した。そして、Yさんにとって

も、そのフレーミングは身近に感じられたのだ。

Yさんの運動参加の経緯は、「基地移設」の一言で呼ばれるできごとが、フレーミングの提供のしかたによって、多様な社会的位置にある人々にとって「身近な問題」と認識しうることを示している。

注

- 1) 沖縄に対して、沖縄以外の日本の地域を指す沖縄方言。「内地」とほぼ同義であるが、「内地」が沖縄を外部として排除する意味合いを含む語であるため、沖縄側の視点に立ってこの語を用いる。
- 2) Yさんへのインタビューは2010年3月6日、沖縄県宜野湾市内のYさんの自宅で3時間程度にわたって行われた。話し手はYさん、聞き手は鐘ヶ江である。
- 3) 引用中の記号は以下の通り。
 () 発話の内容を補足するもの。
 …… 言いよどみやことばを選んでいるような間。
 (笑) 話し手、聞き手ともに起きた笑い。
- 4) 宗教儀礼や祭りの際に行なわれる練り歩き。「心に届け女たちの声ネットワーク」では、自分たちの文化での行動であることの表象として、ヤマトの男性たちが用いる「デモ」ではなく、このウチナーグチ（沖縄言葉）を用いている。
- 5) 女性による社会運動の多くは、日常生活に関わる範囲の事柄についてものである。
 世界的に見て、環境保護運動や消費者運動は、少なくともそのスタートにおいては女性の運動であることが多い。前者については、発展途上国で環境破壊にいち早く気づくのは、水汲みなど家族の生活のためにも、生産活動のためにも田畑や森林と密接につながって生活している女性であるためである。後者については、一家の財布を預かり、家族の健康に責任を負う者として、主婦である女性が商品の品質に敏感にならざるを得ないためであると考えられる。
- 6) 萩原なつ子は、白保の海を守る運動を行ってきた女性の語りを取り上げ、“オバアたち”による、歌と踊りを取り入れたデモのスタイルが、運動経験のない女性たちによって「当初はとまどいがちに」始められ、後に自分たちのスタイルとして確立されていったことを紹介している。“オバアたち”が始めたデモはあたかもパレードのようで、道行く人の注目を集め、既成のやり方でのデモを何度も行いながら注目されることのなかった男性を驚かせたという。
 語り手の女性によると、この経験を通じて、“オバアたち”が、海を守ることは文化を守ることに通じること、だから、「たとえどんなに偉い人がきたとしても」自分たちの言葉、歌、踊りを自分たちの運動スタイルとして行うことが、「立ちはだかる厚い壁を打ち破る」意味を持つことを認識するようになったという。

7) 辺野古住民を中心とした新基地移設反対派の住民団体。

参考文献

- 萩原なつ子，2001「ジェンダーの視点で捉える環境問題——エコフェミニズムの立場から」長谷川公一編著『講座環境社会学環境運動と政策のダイナミズム』有斐閣
- 勝方＝稲福恵子，1996『おきなわ女性学事始』新宿書房
- 熊本博之，2004「ジュゴン，珊瑚礁，基地問題」大畑裕嗣，成元哲，道場親信，樋口直人編著『社会運動の社会学』有斐閣
- 高里鈴代，1996『沖縄の女たち 女性の人権と基地・軍隊』明石書店